

「書くこと」の学習の後で

東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子



Q

生徒たちに何かを書かせると、その後が大変です。コメントを一人一人に書く時間がかるし、それを考えると、書かせること自体がおっくうになります。
書かせた後の指導はどのようにしたらいいのでしょうか。

A

どうやら子どもたちが書くようになるかということは、とても大切なことですが、書いた後どうするかも同じくらい重要なことです。
作文の処理というと、先生のコメントが一番に思いつきますね。確かに先生のコメントをもらうと、子どもたちは嬉しそうです。また書くという気になるかもしれません。



しかし、何かを書いた後の事後指導がそれだけではもったいないです。労力の割には効果的とはいえません。事後指導をいろいろ工夫することは可能です。
今回は、前号の『書くこと』の学習の前に「の続編として、『書くこと』の学習の後で取り組んださまざまな例を紹介したいと思います。

子どもたちは友達の文章を読むことが大好き

前回紹介した「ウソ日記」も「言葉の小劇場」も、必ず書いた後にはいくつかの作品を印刷して紹介しています。プリントを配った瞬間の子どもたちの生き生きとした反応には、毎回思わずほえんでしまいます。

上手な子どもというものはいるもので、〇〇君、またまた登場ということもありますが、コンパクトな学習で文字数もそんなに多くありませんので、たくさん子どもたちが登場できるようにしています。最近元気のない〇〇さんはどうかしら、先日叱られた〇〇君は、などと生活指導的な観点で選ぶときもあります。そういうことができる国語科っていいですね。

書いたものは形として残っているのです、そのまま学習材として使うことができます。どんな授業をしたときも、子どもの書いたものは学習材になる、というのが長い間実践して

きて得た結論です。書かせっ放しにするなんてとてももったいないこと。何かを教えるときに、子どもたちの生み出したものを材料にすることは有効な方法です。

私の教室では、何か書いたら必ずみんなの目に触れる可能性あり、ということにしています。細かいことですが、そのため、印刷ではつきり出るように、常に濃く書くことを約束事にしていきます。

友達の考えを知る、好みを知る、持っている言葉を知る。そのことによって更に自分の知見も広がり、友達と学び合うことの楽しさを実感する。そういう学習の時間を通して、学びを共有する集団ができあがってくるのだと思います。

「コメントを言う合う」

何かを発信したら必ず返信がある。そういう経験は発信の原動力となります。

次に示したものは、「春に」(二年

「春に」 題を考える

- 1 春にはたくさんのお祭がある。卒業、入学、クラス替えに新しい出会い。そんなときの気持ち、この詩になっていると思う。いろんな悩みがでたり、言いたいことが言えないとか、そんなことがつまっている。
- 2 春という季節はいろんなことがいっぺんに始まり、頭の中がごちゃごちゃになって、自分でもわからない気持ちになるからね。だから、「春に」だよ。
- 3 自分の周りの様子がいろいろ変わったとき、自分の中に芽生えた気持ちがあるのか探ると思うんです。春はいっぺんに様子が変わりますよね。
- 4 春は様々な思いが渦巻くものだ。
- 5 大地のいろんな所から感じる新しいエネルギーがまさに、いろんな出会いの春にぴったりだと思っ

■コメント例

- ・1番の〇〇さんの意見について言います。クラス替え、新しい出会いというところがポイントだ！って思ったし、何か言葉にならない季節だね、と思いました。
- ・5番の〇〇さんの文の中に、「大地のいろんな所から感じる新しいエネルギー」という言葉があるんですけど、カッコイイ表現だと思っていました。



人、手を挙げて」
と云うと、どの考

と云つと、どの考
えにもたくさんの子
どもたちが手を挙げま
す。書いた本人は少し照
れくさそうにしていますが、
書いてよかったなと思つたことで
しめし。

このようにコメントを言い合うのもいいですし、時間がないときは心に留まったところに線を引かせるだけでも「返信」はできます。コメントを言わなくていいので短い時間でできるでしょう。どこに線を引いたかだけを発表させても、いい雰囲気になります。

コメントを書く

次に示したものは、二百字の作文で「私はひと言で言つと○○な子どもでした」という題の作品です。最初に定義付けをして、その具体例を述べていく学習です。その作文を書いて文集にし、「コメントを書き合う」学

習をしました。自己紹介のバリエーションとして、一年の一学期にやつたものです。

私は可能な限り、こうした文集づくりを心がけています。形になって残ることで、学習材として使えますし、コメントを書き合う学習が可能になるからです。

コメントは、今の友達ではなく、昔の友達の様子に対して書くので、あまり遠慮せず書けるようです。受け取る方も、楽くなるような温かい雰囲気になりました。

【生徒の作文例】

僕は、ひと言で言うと思議な子どもでした。

僕は、ひまで、やることがないとなぜか、いつも何も持たずに散歩に出るのです。何となく、いつも散歩をするのです。長いときは、二時間半も歩いたことがあります。行き先を考えずに、ただ歩くのです。周りの景色や音を楽しみながら。ときには、公園のベンチで休息をして。僕はこんな感じで、散歩を楽しんでいました。

講評する力をつける

私は、どんな単元でも、最後は必ず「まとめ」の時間を設定して、講評の時間をとっています。そのとき使うのが子どもたちの書いたものです。あるときは文章の最後に書いた「あとがき」だったり、授業記録だったり、コメント集だったり、作品集だったりします。つけたい力が何だったのかを確認しながら、学習の振り返りの材料になる文章を使います。

この「まとめ」の時間は単元の仕上げとしてとても重要であり、子どもたちは実際に自分たちが書いたことに対する講評なので真剣に聞いています。だからこそ、いいかげんなことは言えません。講評するということとは、講評するための観点をしっかりと持っていなければならないということなのです。観点とは、どんな力をつけるためにこの単元をやってきたのかということ。そのことを常に意識していることが求められます。

よい講評をするためには、まず、

子どもの書いたもののいい点を見つけて、言葉で表現できる力をつけることが重要です。どんな文章を見る時も、いい点はどこかなと考えながら読む習慣をつけるといいですね。たとえば次のようなポイントがあります。

- ・ 字がきれいでいい
- ・ こんな漢字や言葉を使っているのがすばらしい
- ・ 目の付けどころがいい
- ・ 書き出しがいい
- ・ 楽しんで書いているところがいい
- ・ テーマにぴったり
- ・ ここまで深く登場人物の心情を読み取れている

「いいねえ、すごいね、うまいねえらいね」などといった漠然とした言葉ではなく、もっと具体的に指摘できることが重要です。中学生ともなれば、ほめられている言葉に説得力があるかどうか、すぐに気づくものです。

ほめる言葉が豊かに出てくること

【コメント例】

だれの作文に対するコメントか名前を書く

今と同じでおもしろいケッたんですね。
悔しい気持ちは大切だね。これからもがんばって
ケがをしても、あそぶくらいスギたったんね。
今と同じでフワフワしてたんね。秋田のいし所
私も、あそぶのが大好きです。
私も、これがりで、すぐ泣き虫です。その気持ちわかります。
今は全然そんな事しなさい、ってのにね。
すごい体験をしていて、すごいわ。よくつかまわね。
すこし、ケしている文で、グリリ、今、いふから、わかんないわ。
いつも、ケしている伊藤、と、そ、そ、そ、あ、さん、わ。
本当にケ、カ、強、マ、ですわ。

いまでもじうぶん自分で言つたことを笑つてる!!
バレー部^部でもうまいと思つて!! バレーバカや^笑
市伊儀のユナもしらなかつたから^初しりだ^だ。
ちや^{ちや}とだけしなりましたほー知い^いなも...。
も、とあとなしにするかと思つてたよ...。
二つづなつの家^家にバレー人形おくてやるよ!!^笑
お酒は20才からです!!^笑ヤ、マジでよ!!
でも、フッキーだ^だな女!!^笑その運^運かけてよ^{♡♡}^笑
自分^{自分}で三つ^{三つ}つてるほど、そのあす^{あす}とやみ^みなくないと思つたうさつ、
そのおす^{おす}本^本が^がひといち^{いち}誰か^{誰か}とい^いな^なは^は本^本だ^だよ...。
あるいれ^{いれ}カ^カッ^ッヨ^ヨ。^笑ってな、バカ^{バカ}なだけ? ^笑
もつとすち^{すち}つ^つ二つ^{二つ}!!^笑親^親をこまら^らした^たら^らか^かメ^メよ[♡]

【私の講評例】

鑑賞文らしい作品ができ上がりました。「作品のよさ」を表現する、という目標がしっかり達成できていますね。

まずは書きだしがキリリとしていて、かっこいいですね。「ぐに違いない」という表現が緊張感を生み出しています。解説を読んで理解したこと話し合いで出てきたことが上手に文章の中に組み込まれています。またそれに対する自分の思いも「まるでこのようだ」という表現で巧みに入れています。最後の「万感の思い」が全体を引き締めていますよ。

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規

は、教師として欠かせないことではないでしょうか。すぐに上手になるものではありません。常に子どもたちの書いたものを講評する場を設定して、挑戦し続けることが大切ですね。左にあげた俳句の鑑賞文は、子どもが書いたものです。あなたならどんなふうに講評しますか。

子規は當時、不安と悲しみで胸がいっぱいだ。たに達しない。俳句に感情の言葉が書かれていないのが確実に伝わっている。また、そこがこの作品の魅力でもある。この俳句のいくたびも雪の架さを尋ねけりという所はまるで自分の命の長さを尋ねているようだ。

た。た一行の文が表現するその風景には、子規の悲しみがいっぱい詰まっている。あずかな言葉の中に子規の万感の思いが込められていまるだ。